

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 17 日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520597

研究課題名（和文） 方略的プランニングが作文タスクに与える影響の検証と効果的指導法の開発

研究課題名（英文） Development of an effective instructional model for writing through the examination of the effects that strategic planning has on a writing task.

研究代表者

大和 隆介（YAMATO RYUSUKE）

京都産業大学・外国語学部・教授

研究者番号：60298370

研究成果の概要（和文）：

本研究は、タスクを用いた作文指導の効果的な指導モデルの開発を目指して、事前プランニングの量と内容が、作文タスクの遂行にどのような影響を与えるかを検証した。その結果、(1)短時間でも事前プランニングを提供すること、簡易なものであっても評価規準を提供することが、作文タスクの改善に効果があること、(2) 作文産出モデルのプロセスや学習者の習熟度により、その効果が異なる可能性があることが示された。

研究成果の概要（英文）：

In order to develop an effective instructional model for writing, this study examined what effect the length and content of pre-task planning might have on a writing task. The main findings of this study are (1) even a few minutes' pre-task planning could improve the quality of a writing task, (2) instead of providing detailed instruction, just giving evaluation criteria could enhance learners' self-regulated strategic planning and thus lead to better task performance, and (3) such factors would exert varying effects depending on learners' proficiency level and the focused-process of a writing production model.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：英語教育学,応用言語学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：方略的プランニング, 作文タスク

### 1. 研究開始当初の背景

#### (1) 本研究の学術的背景

多くの国で外国語教育の主流となりつつあるコミュニケーション活動中心の教授法（CLT：Communicative Language

Teaching)は、我が国においても徐々にではあるが浸透しつつある。学校教育での限られた英語の授業時間数を考えれば、今後更に求められるものは、コミュニケーション活動偏重の指導（Strong version of CLT）ではなく、

コミュニケーション活動(Meaning)と形式(Form)に対する意識高揚のバランスが取れた指導(Weak version of CLT)の具体化であろう(Richards & Rodgers, 2001)。

### ①「意味」と「形式」のバランスを目指す2つのアプローチ

このような共通の基本認識に立ちながらも、研究者の間では「意味」と「形式」のバランスの取り方について、異なる2つの考え方が存在しているように思われる。1つは、伝統的なPPP(文法説明⇒練習⇒応用練習)アプローチを改善したPCPP(文法説明⇒十分な理解⇒練習⇒応用練習)アプローチである(村野井 2006)。このようなアプローチにおいては、学習者は教師からの文法説明を理解した上で既習の知識と統合(synthesize)させる演繹的(deductive)な言語活動を主に行うことになる。一方、もう1つの考え方は、タスクを利用しながら学習者の中間言語の発達を目指すタスクを利用した教授法(TSI: Task-supported Instruction)である(Ellis, 2003)。このようなアプローチにおいては、実践的な状況でタスクを首尾よく遂行するために、学習者は与えられた言語情報を分析(analyze)し必要な知識や規則を発見する帰納的(inductive)な言語活動を積極的に行うことになる(Wilkins, 1974; Nation, 1988)。

### ②タスクを利用した指導(Task-Supported Instruction)の重要性

両者を比較すれば、伝統的な演繹的学習を基盤とするPCPPアプローチの方が多くの英語教員にスムーズに受け入れられる可能性が高い。しかしながら、平成20年に公示された新学習指導要領において、実践的な英語使用の重要性が今まで以上に強調され、授業での一層の英語使用が推奨されている状況を考慮するならば、学習者に実践的英語使用の機会を多く提供するTSIを積極的に導入する必要がある。また言語活動に主体的に取り組む帰納的学習を重視するTBIは学習者の自律的学習能力の向上にも貢献すると考えられる。

#### (2) 本研究の学術的特色・独創性

### ① 作文タスクの為に「現実的かつ簡略な」方略的プランニングを明らかにしようとする点。

Ellis (2005) は、プランニングをそのタイミングと特徴から次のように分類している。多くの先行研究(Foster & Skehan, 1996; Menhert, 1998; Bygate, 1999; Yuan & Ellis, 2004) は、事前プランニングやタスク内プランニングの時間を学習者に十分に提供することにより、程度の差はあるが、タスクの「流暢さ」「正確さ」「複雑さ」のいずれも向上す

ることを示している。

しかし、教室の内外を問わず実際に作文を行う場合、一般的にはリハーサル(リハーサル)の機会や十分な方略的プランニングの時間が与えられることは無く、時間的なプレッシャーの中で行われる。加えて Ellis(2003)は、「授業計画としてのタスク(task as work-plan)」と「実際に遂行されるタスク(task-as-process)」を区別し、学習者が必ずしも教師の意図通りにタスクを遂行しない事実を指摘している。こうした作文タスクに関わる2つの現実的側面に留意すれば、わずかな時間でできる「教師主導の効果的な事前プランニングの方法」や「学習者に主体的に事前プランニングを考えさせる教育的介入の方法」を検証することが大きな教育的意味を持つと考えられる。

そこで、本研究では、わずかな事前プランニング(3分間)が与えられた時、「教師が与える具体的な学習方略の指示が生徒のパフォーマンスに及ぼす影響」と「与えられたタスクに対する評価規準の提示が生徒のパフォーマンスに及ぼす影響」を検証しその効果を比較する。

### ② 作文の産出モデルに留意しながらプランニングが作文タスクに及ぼす影響を検証する点。

スピーキングの効果的指導法を考える場合、その産出モデル(e.g., Levelt, 1999)に留意して指導法を開発することが必要であろう。作文についても同様である。しかしながら、意外なことに、プランニングが作文タスクに与える影響を検証した多くの研究は、その産出モデルにほとんど言及していない。そこで本研究は、短時間の方略的プランニングが、Kellog (1996)が提唱する作文に関する3つのプロセス：内容構成(formulation)、表現(execution)、モニタリング(monitring)のどの部分にどのような影響を与えるかを検証する。具体的には、「内容構成に焦点を当てた方略的プランニングを行った場合」と「表現プロセスに焦点を当てた方略的プランニングを行った場合」の学習者のパフォーマンスの違いを検証しその効果を比較する。

## 2. 研究の目的

上記の認識に基づき、本研究は作文タスクを用いた効果的なライティング指導モデルを開発することを目指して、種々の方略的プランニングの有り様が作文タスク遂行に与える影響を実証的な方法で検証した。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究1

Kellog(1996)の作文産出モデルにおける「表現(Execution)」のプロセスに焦点を当て

てプランニングの効果を検証するために、物語再生タスクを用いて、以下のリサーチクエストを検証した：(1)方略的プランニングの有無によりパフォーマンスに違いが生じるか、(2)「評価規準の提示」や「効果的作文方略の使用」によりパフォーマンスに違いが生じるか。具体的には、以下の予備調査と本研究を実施した。

### 【予備調査】

①目的：

(a)本実験の作文タスクが時間的プレッシャーを受けたもの(within-task pressured condition)になるように、作文タスクの制限時間を決定するデータを得る。

(b)本実験で参加者に与える使用方略の指示内容と評価規準を決定するためのデータを得る。

(c)実験1・2で使用する作文タスク(4コマ漫画)の難易度を調整するためのデータを得る。

②参加者と方法：英語力が同程度の大学生10名の協力を得て、本実験と同様の作文タスクを実施する。その後聞き取り調査を行い必要なデータを収集する。

③結果：

予備調査の結果、以下の点が示された。

(a)時間的制約を感じながら作文タスクを遂行する時間として7分が概ね適切。

(b)学習者がより良いパフォーマンスのために、内容、形式、洗練性等の要素を意識していることが示された。

(c)使用した2種類の再生用物語は同程度の難易度であることが確認された。

### 【研究】

①参加者：英語力が同程度の大学生2グループ(20名×2)

②作文タスク：実用英語検定で用いられるような4つの絵を見て物語を創作するタスク。調査1と調査2では、異なる絵を使用するが予備調査でその難易度が同程度になるよう調整。

③手続き：2つのグループを対象に、同じ条件(事前プランニングもタスク内プランニングも無い)で作文タスクを行う実験1に続いて、異なる条件(使用方略の指示有りグループと評価課題提供グループに区別)で行う実験2を実施。

④分析：調査で得られた実際の作文の評価は「流暢さ」「正確さ」「複雑さ」の3つの観点から量的分析を行う。また作文直後に実施する質問紙により、参加者がタスク遂行時に考えていた内容に関するデータを収集し量的分析の補助資料とする。

⑤結果：

(a)プレタスク・プランニングの効果

3分間という短時間であっても事前プランニングを提供することが物語再生タスクのパフォーマンスを向上させることが示された。

Table 1: Effect of Pre-task planning on Story-Rewriting

	Class A (n=15)		p	Class B (n=16)		p
	Exp. 1 (July)	Exp. 2 (October)		Exp. 1 (July)	Exp. 2 (October)	
Fluency (Total Words)	77.8 (SD 22.1)	106.1 (SD 14.4)	**	76.1 (SD 16.7)	95.3 (SD 11.1)	*
Accuracy (Ratio of Error-free T-units)	0.62 (SD 0.16)	0.77 (SD 0.14)	*	0.57 (SD 0.14)	0.66 (SD 0.17)	*
Complexity (Ratio of clauses to T-units)	1.12 (SD 0.21)	1.86 (SD 0.14)	*	1.39 (SD 0.17)	1.43 (SD 0.16)	n.s.

n.s.: not significant, \*\* : p<0.01, \*p<0.05, +: p<0.1

Table 2: Comparison between the 2 classes under the same condition (no pre-task planning).

	Fluency (Total Words)	Accuracy (Ratio of Error-free T-units)	Complexity (Ratio of clauses to T-units)
Class A (N=15)	77.8 (19.9)	.62 (.12)	1.43 (.21)
Class B (N=16)	76.8 (16.7)	.57 (.17)	1.39 (.17)
p	n.s.	n.s.	n.s.

n.s.: not significant

(b)評価規準提供の効果

簡略なものであっても、評価規準を提示することにより学習者の意識が高まり、物語再生タスクのパフォーマンスが向上することが示された。また、学習者の習熟度により、その効果が変化する可能性も示された。

Table 3: Comparison between the 2 classes under the different conditions.

	Fluency (Total Words)	Accuracy (Ratio of Error-free T-units)	Complexity (Ratio of clauses to T-units)
Class A (N=12) (With Criteria)	106.3 (14.4)	.77 (.20)	1.65 (.14)
Class B (N=16) (No Criteria)	95.3 (21.1)	.68 (.13)	1.43 (.15)
p	*	n.s.	**

n.s.: not significant, \*\* : p<0.01, \*p<0.05, +: p<0.1

**Table 4: Comparison between the 2 different proficient levels in Class A.**

	Fluency (Total Words)	Accuracy (Ration of Error-free T-units)	Complexity (Ration of clauses to T-units)
Upper Group (N=6)	107.5 (17.4)	.83 (.13)	1.69 (.13)
Lower Group (N=6)	105.1 (12.2)	.71 (.13)	1.61 (.15)
<i>p</i>	n.s.	*	n.s.

n.s.: not significant; \**p*<.05

19

## (2) 研究 2

「物語創作タスク」と「物語再生タスク」を用いて、評価規準提示による方略的プランニングへの意識高揚が作文の産出モデルの「内容構成(Formulation)」と「表現(Execution)」の 2 つのプロセスに及ぼす影響を検証する。

### 【予備調査】

研究 1 の予備調査と同様に、大学生 10 名の協力を得て、意図した条件で本実験が確実に実施できるように必要なデータを収集した。その結果、プレタスクの時間、作文タスクの時間共に研究 1 と同じで問題ないことが確認された。

### 【研究】

- ①参加者: 英語を専攻している大学生 98 名。
- ②材料: 4 コマ漫画を用いた作文タスク、タスク直後の方略調査。
- ③方法: 参加者を 4 つの群に分け、異なる条件下で作文タスクを行った。具体的には、「内容構成(formulation)」のプロセスにおける認知的負荷を異なるものにするため、4 コマ漫画が揃った群と 2・3 番目を抜いた群とに分け、更に評価規準を与えた群と与えない群に分けた: A 群 (4 コマ、評価規準有)、B 群 (4 コマ、評価規準無)、C 群 (2 コマ、評価規準有)、D 群 (2 コマ、評価規準無)。
- ④分析: 英文の「流暢さ」「正確さ」「複雑さ」を従属変数、「絵欠損の有無」「評価規準の有無」「方略使用意識」を独立変数とし量的分析を行った。
- ⑤結果:
  - (1)方略調査で得たデータを因子分析した結果、参加者が 4 種類の方略 (①時間管理、②形式への意識高揚、③意味への意識高揚、④タスクに対する興味) を用いていることが分かった。
  - (2)作文結果に対して、「絵の欠損有無」は「評価規準提供の有無」よりも大きな影響を与えることが明らかとなった。

(3)「絵の欠損の有無」と「評価規準提供の有無」の相互作用は 4 コマの絵が揃っている場合に幾らか認められた。

以上の結果より、認知的負荷が大きな状況で作文を行う際、評価規準を提供するだけでは作文の質に顕著な影響を与えず、タスクの難易度に留意する必要があることが分かった。

表 1: 抽出因子負荷量

Questionnaire Items	Factor 1	Factor 2	Factor 3	Factor 4
Factor 1: Time Management				
Q3: 準備の時間を有効に使えた	0.758			
Q4: 準備の時間は適当だった	0.701			
Q10: 作文の時間は適当だった	0.799			
Factor 2: Focus on Form				
Q5: 正確な文を書こうとした		0.668		
Q6: たくさんの文を書こうとした		0.758		
Q7: 長く複雑な文を書こうとした		0.749		
Factor 3: Focus on Meaning				
Q8: ユニークな物語を作ろうとした			0.801	
Q9: 思いついた語は似た単語を使った			0.749	
Factor 4: Interest in Task				
Q1: この課題に興味を持てた				0.727
Q2: 絵の意味や内容は分かり易かった				0.743

## 4. 研究成果

本研究は、本研究は作文タスクを用いた効果的なライティング指導モデルを開発することを目指して、種々の方略的プランニングの有り様が作文タスク遂行に与える影響を実証的な方法で検証した。その目的を達成するために上記の調査・実験を行い、以下の知見を得た。

研究 1 から、(1)わずかな事前プランニングを与えることが作文結果の向上にプラスに作用すること、(2)細かな指導を与えなくとも評価規準を提示しただけでも学習者の習熟度により相応の効果が期待できることが明らかとなった。

研究 2 からは、(1)物語創作タスクにおいて学習者が 4 種類の方略を使用していること、(2)「絵の欠損有無」は「評価規準提供の有無」よりも大きな影響を与えること、(3)「絵の欠損の有無」と「評価規準提供の有無」の相互作用は 4 コマの絵が揃っている場合に幾らか認められることが示された。

これら 3 年間の研究に得られた知見は、残念ながら効果的な作文指導モデルを構築するために十分なものとは言えないだろう。しかし、効果的指導のためのいくつかの有益な示唆を含んでいると解釈することは可能である。すなわち、(1)作文タスクにおいて内容構成(formulation)における認知的負荷が高い場合は、学習者の意識や作文方略が表現(execution)のプロセスに及ぼす影響は限定的なものとなることから、作文指導においては「書く内容」をしっかりと整理して書き出すことが大切となるだろう。一方、学習者にとって馴染みのあるトピックや書くべき内容が明確な場合は、より良い英文を書くために、言語的要素に必要な意識を向けさせる評価規準を意識させることが必要となる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者,研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 3 件)

① Ryusuke Yamato, “What effects does strategic planning have on a writing task?”, The 35th Thailand TESOL International Conference “E”-novation and Communities in ELT, Jan. 26th , 2013 Pullman Khon Kaen Raja Orchid Hotel, (Khon Kaen, Thailand)

② Ryusuke Yamato, “How do various types of pre-task planning affect story-rewriting tasks?”, The 10th Hawaii International Conference on Education, January 6<sup>th</sup>, 2012, Marriott Hotel, (Honolulu, USA)

③ 大和隆介, 「タスクの遂行において自律的プランニングを促す簡略な指導法の検討」, 中部地区英語教育学会, 2010年6月26日, 石川県立大学

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

大和 隆介 (YAMATO RYUSUKE)

京都産業大学・外国語学部・教授

研究者番号 : 60298370